

# 絵葉書 特集 鉾山町からの便り



景全町川相（渡佐）

↓現在の相川にある施設の位置を、絵葉書に落としてみました。



海岸を埋め立てる前の大正期の相川市街地を写した絵葉書です。昭和11年刊行の『佐渡名勝史』（今でいう観光ガイド）では「一番先に目につくものは各家々の屋根にごろごろと列せられてある白い石又は濱一ぱい敷かれてある白い砂利」と市街地を紹介しています。

# 相川 あいかわらばん 瓦版

## 第36号

2018年11月22日発行

《編集・発行》  
佐渡市産業観光部  
世界遺産推進課  
電話 0259-63-5136  
FAX 0259-63-6130

### 絵葉書にみる鉾山観光

今回は、大正末期から昭和初期にかけて相川で盛んに発行された「絵葉書」を紹介します。「観光」が相川の重要な産業になっていくなかで、絵葉書が周辺の書店などで観光客向けに販売されました。

観光地の絵葉書には、その観光地を象徴する風景や物を写したものが数多くあります。大正末期から昭和初期の相川の絵葉書は、約90年前の相川観光（人々が何を求めて相川を訪れていたのか）を示しています。90年前といえば、佐渡鉾山で最先端技術を駆使して多くの金銀が産出され、鉾山も町も活気に満ちていた頃です。その当時の相川観光、今とは少し異なりました。最も大きな違いは、鉾山で操業中の施設などが「産業観光」の対象であったことです。相川の絵葉書には、鉾山で稼働中の機械や、そこで働く人々が被写体にしたものが多くあります。

一方、戦後になると、そうした相川観光は一変します。それまで富裕層が中心であった旅行が大衆に普及し、団体旅行が盛んになっていったのに対し、佐渡鉾山の生産量は激減していきます。その時代のうねりの中で、佐渡鉾山は鉾業から観光へ大転換し、今日に至ります。

本紙2・3面では、そんな相川のひと昔前の観光をあらわす絵葉書を紹介いたします。



### 観光客向けの風景印スタンプ（昭和初期）

相川の観光スポットのイラストが入ったスタンプが、商店や旅館などにそれぞれありました。

# 鉾山町の絵葉書

明治期から昭和初期にかけて相川で発行された絵葉書です。その種類はたいへん豊富で、生きた鉾山の姿を絵葉書で伝えています。その一部を紹介します。

相川にあった高級料亭「清新亭」の建物や「道遊の割戸」、佐渡おけさなどが描かれたスタンプ。▶



中連さけおの祭山鑛 (物名渡佐)

鉾山とともに絵葉書で多く取り上げられた「佐渡おけさ」です。葉書には「佐渡名物鉾山祭のおけさ連中」と説明書きが付いています。鉾山祭で披露される「おけさ」のにぎわいが観光客に大々的に紹介されました。かつては、平日であっても相川の市街地でおけさを披露していたようです。

また、大正と昭和期にかけて佐渡の民謡歌手として活躍した村田文三氏は、一時は佐渡鉾山にも勤めていました。



昭和初期の絵葉書です。中央下にみえる坑道は、佐渡金山の観光坑道「道遊坑(明治時代コース)」の出口で、その左手は高任豎坑の槽です。高任豎坑は、垂直に掘られた鉾石搬出用の坑道で、その深さは最終的に海面下530mに達しました。

葉書には「佐渡鉾山参観記念」のスタンプが押されています。ちなみに、明治22年に鉾山参観者から得た謝礼は547円58銭でした。(当時の教員の初任給は8円程度)



絵葉書には「佐渡鉾山砂金採取」とあります。これは、濁川の上流にある鉾山から浜へ、水流で運ばれ堆積した金銀を含む砂(砂金)を採取しているところで、「浜石採取」とも呼ばれています。この浜石採取は昭和初期から始まり、同18年まで続きました。

今はもう見られない、相川の浜辺を写した貴重な一枚です。上流から運ばれた鉾石が、長い時間をかけて波にもまれ、白く美しい砂と小石の浜を形成していました。



相川を代表する景勝地として、下相川の千畳敷の付近にある「弁天崎」が絵葉書になっっています。岬の手前には、戸河神社が現在とほとんど変わらない姿で描かれており、また、神社の向こうには下相川の集落も顔を覗かせています。現在ある「観月橋」はこの頃はまだなく、橋は昭和9年に設置されました。このあたりは昔から地域の海水浴場であり、今も夏になると人々が訪れています。



相川のシンボル「道遊の割戸」の割れ目の部分で、鉾石を採取している写真です。

わずかな木材を組んで、岩盤にへばりつくように足場を作り、男性達が高所で作業しています。下の方にはトロッコも見えます。

道遊の割戸は、本当に人の手で山が割られたということが実感でき、人の背丈と比較するとその深さがよく分かります。

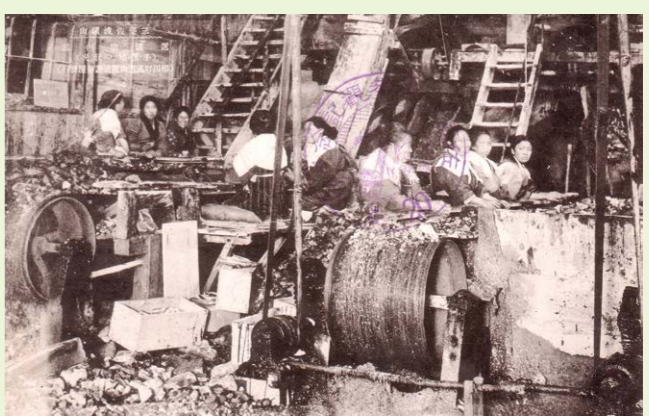


「郡道相川と小川間開通記念」のスタンプが押された葉書です。相川と小川の郡道は大正3年に開通しました。

写真は「高任2番坑」という名の坑道で岩盤を砕いて鉾石を採取しているところです。真っ暗な坑道内をカンテラ(携帯用の石油ランプ)の光で灯し、作業するための足場として丸太を横に渡して、そこに大勢の男性が並んで作業しています。男性達は鑿と金槌を使って、固い鉾脈を人力で砕いています。



現在、鉾山の施設跡などが遺跡として残る北沢地区に、まだ現役の施設があった頃の風景です。葉書の中央あたりに見えるのは煉瓦造りの火力発電所(発電機室棟)で、現在もその建物が保存されています。その隣にある大きな建物は、職員のための大浴場です。葉書右上は、台地上にある弥十郎町あたりで、大きな煙突が2本見えます。斜面地をいかして様々な施設が建設されました。相川が鉾山の町であったことがよく分かる一枚です。



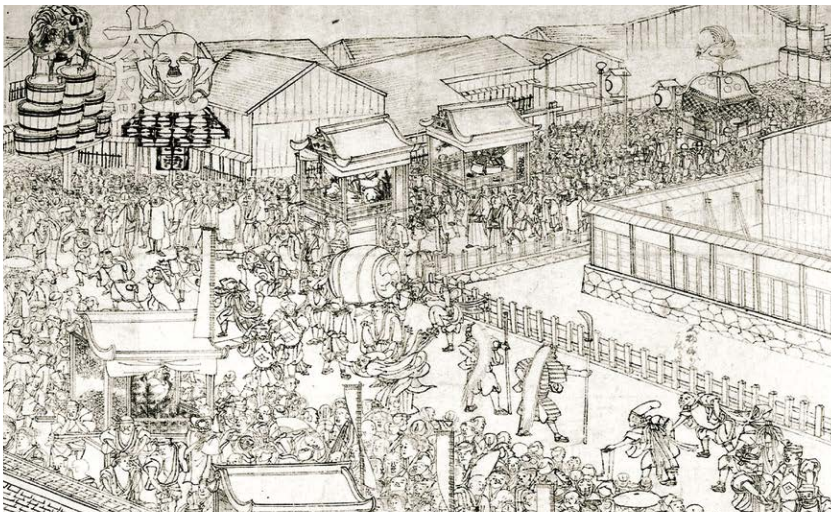
現在の道遊坑(観光坑道)の出口の近くにあった「高任選鉾場」での作業風景です。着物姿の女性が、ベルトコンベアで運ばれてくる鉾石を選び分けているところ。鉾石に混ざっている不要な石を、女性達が見分けて抜き取っています。鉾山の古写真をみると、10代の若者から、年配の女性まで、様々な人が鉾山で働いていたことが分かります。笑顔の女性も多く、談笑しながら仕事を楽しんでいる様子が伝わってきます。

# 相川の今昔

## 善知鳥神社祭礼（相川祭り）

10月19日、相川下戸村にある善知鳥神社の祭礼として「相川祭り」が執り行われました。神輿をかつぐ棒組の掛け声、太鼓組が打ち出す力強い響き、下り羽のお囃子など、にぎやかな祭りの音が近づいてくると、家から皆出てきて顔なじみの人を見つけては話に花を咲かせていました。

相川の総鎮守である善知鳥神社は、仁平元年（1151）に創建されたと一説にいられています。その所在地は、さまざまな変遷を経て、慶長9年（1604）、大久保長安による鉱山町の町立ての一環として現在地に移りました。大正15年発行の『佐渡神社誌』によると、善知鳥神社は「氏子2,000戸、崇拝者600戸」とあります。現在の善知鳥神社は鹿伏～下相川の総鎮守ですが、古くは、相川を含め下戸・下相川・羽田・小川・達者・北狄・戸地を「善知鳥七浦」と称し、これら一帯の総鎮守であったようです。祭りは、寛永20年（1643）にはすでに行われていたことが文献より明らかで、『天保年間相川十二ヶ月』の絵図をみると江戸時代の祭りの盛大さが窺えます。善知鳥神社祭礼は今日まで400年近く続き、今も地域の誇りとして受け継がれています。



「天保年間相川十二ヶ月」より「九月善知鳥祭礼」（佐渡市蔵）

天保年間の相川の年中行事を描いた絵図の1枚です。当時は9月に祭りがあり、絵図右手に堀らしきものが描かれていることから、西坂をのぼり奉行所前を巡幸している一行を描いたものと思われます。



神輿をかつぐ棒組（今年10月）



豆まき（今年10月）

### 〈訂正とお詫び〉

「あいかわらばん35号」（9月25日発行）の「佐渡の今昔」の記事に誤りがありましたので訂正します。相蓮寺の開基を「慶応7年（1602）」として紹介しましたがこれは誤りで、正しくは「慶長7年（1602）」でした。

## 今月のにゃんじー

### 「こたつむり」

一度入ると抜け出せない……。  
夢はこたつむりになって冬を過ごすことです。



第37号

1月25日刊行予定